

連載

# ああ、猪猟泣き笑い

## その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました：



### ③ 強いだけでは大猪は止められない

●1頭で止められなければ「猪犬」とは言えない!

最近、よくこんなことを訊かれる。「お前の犬は、1頭ではイノシシを止められないのか?」と。色々話す中で、なぜこのような質問をするのかやっと判明したのであるが、その原因について、私が引き連れて行く愛犬との山での体験を基に、触れてみたいと思う。

私は犬が大好きで、ただただひたすら犬達を山で鍛えながらやっとここまで来ることができた「俺流の猟芸」を持つ愛犬群が頼りの単独猟者である。私は常々、「犬の芸の何をもって(よし)とするかは、人それぞれである」と言い続けてきたし、今でもそのように考えている。誰がどのような方法で猟をしようかと、愛犬を何頭掛けてイノシシを撃ち獲ろうと、全く個人の自由である。

猪猟で犬を何頭掛けるかは、猟人がその場で判断しなければならぬ大切なことである。イノシシの大きさ、人家周辺か、立っている山か、ツタ藪か…等々の状況によって決めることで

あり、1頭で止められないから何頭も犬を掛けるのか、犬が未熟だから多く掛ける…といったものではない。

私の場合は、1頭でも止められる実力犬を何頭も掛けることで、「力でイノシシをねじ伏せる止め」をしてもらいたいからで、単独猟で確実にイノシシを撃ち獲るには、これが一番の方法だと思っている。犬群の力がイノシシに勝るといふことは、イノシシが「近くで止まる」ことと、「移動しない」ことに繋がる。

もう一つ大切なことは、かけがえない愛犬が受傷したり、命を落とすことがないようにとの配慮からである。

私の犬舎には、1頭でもイノシシと渡り合う力を持った犬が10頭ほどいるが、そのうちの半分は牝犬なので、猟中に発情となり、何頭かは戦力にならないことがある。

私は出猟のときは、いつも5頭ぐらいを使っているが、1頭で大猪が止められるのは、体が小さい犬である。大きな強い犬では大猪はまず止まらないと思うし、止まるとしても、単独猟

では撃ち獲れないほど遠くに行つてからである。また、強力な「咬み犬」も同じで、このような犬はいつも傷だらけになる。あくまで私の犬達の例だが、強い犬は吠えて寝屋に飛び込むからである。

「咬み」を前提で、1 m以内で吠え込んだとする。このときには、大猪であっても必ず飛び出して逃げるのが普通である。そこで咬み止めればよいが、子猪ならいざ知らず、大猪なら咬みつかれても、犬を引きずって地響きを立てて走る。このときに犬は立木にぶつけられたり、咬んだ歯を取られることもある。イノシシは臆病だが、寝屋立ちするときは特にすごい力で、とても止めきれぬものではない。また、犬が寝屋に寄りついて、1 mほどの距離から吠えれば、「追い犬」で弱いブルーチックであってもイノシシは必ず飛び出す。一目散に逃げ出したイノシシを「この先、どこで止められるか」なども、その犬が持つ立派な「猟芸」であり、「実力」だと言える。

そのことについては「寝屋止め」の項で述べることにする。

要するに、強い犬1頭では、イノシシは止まらないことと、大猪を止めるのは小型犬の「最高芸」であることを伝えたかったのである。

### ●「クマ」号の名芸(成功例)

私は、大切な猟期の1週間で誰からの誘いも断り、何も手につかないまま、ただ犬舎を行ったり来たりの日が続いていた。「ミス号」と「ナオ号」の小屋が空いたままで、これでは寂しいので子犬の二代目「竜号」と「和号」を入れてやった。

「ミス号」と「ナオ号」を失ったことは、いくら悔いても悔やみきれなかったが、もうすぐ正月である。新年までこの気持ちを引きずってはられない。そんなことを考えていると、「クマ号」達ベテラン犬が「おやじ山へ行こうよ」と、しきりに催促する。彼らには、私の沈んだ心がわかつていたようだった。「宝犬」として大事にしていた「ミス号」と「ナオ号」を失くしてから8日経った平日。私は、気を取り直して群馬の猟野に立っていた。この日、可愛い相棒の孫は学校があり、文字ど

おりの単独猟であった。

いつもの猟場には6時30分に着いた。愛犬も「クマ号」「ブル号」そして「クマ子号」の3頭である。ここは以前、「ミス号」と「シロ号」「クマ号」まで切られた場所、イノシシは寝屋で止まるが、それからが大変苦労する。しかし、イノシシが寝ている場所で毎年2〜3頭は獲れる。私の穴場でもある。

この沢は、一番奥の高い所は1500 m級の山で、そこに居なければ小沢に良い場所が続く「半日コース」である。ただ、いつもイノシシが寝ている場所は、人家より500 mほど林道を登った大きなカーブになっている出峰で、林道はその峰を掘り下げて作ってある。

その先の小沢で車を止め、考えた末に「クマ号」1頭を箱から出し、「ブル号」と「クマ子号」は車に乗せたまま、少しだけ窓を開けておいた。イノシシは、この出峰の先の地竹が群生している所に寝ていて、下から攻めると必ず見通しの利かない上へ、つまり、沢に止めた車の所に逃げて来る。車をこの場所に止め、車に乗

せられたままの「ブル号」達が鳴くのは、ちょうど一人の、それも平気で音を立てる下手な「マチ」を置いたようなものである。ここで犬が鳴いていけば、イノシシは下に下るよりほかはないよし、これで準備OK。

登つて来るときに確認した人家の横のコンニャク畑は、昨夜もイノシシが出ており、小さなウンボで掘り起こしたようになっていた。「よしクマ、行くぞ」と、その場で放犬した。「クマ号」は、他の犬がいないので、いつもより長々とおしっこをしながら、独特の高鼻でクンクン音を立てて、臭いを取っている。

そして「クマ号」は、ものすごくスピードでもと来た道を30 mほど戻り、左手の大きな杉林の中にある小道を走り出した。確実に目標を得たよう、掘り跡のほうへは行かずに杉林を狩り込みながら進む。上方の車から「ブル号」と「クマ子号」の不満げな鳴き声が続いている。

今回は、車の方向に向かう形で、大きく左に狩り込む作戦である。この先、「クマ号」が左に狩り込めば、いつものイノシシの寝屋で、右に行けば人家の下



ブローニング306で仕留めた125kgの大猪

の沢伝いの寝屋だが、この場所は、並の犬では猟ができない。犬がイノシシに吠えつけば集落に出てしまうし、そのように考えると最悪の猟場かも知れない。

「クマ号」達の場合、仮に集落に下りたとしても、住人や家畜などに決して悪さはしない。だがここは、猟犬が良くなければ犬は掛けられない場所だし、猟人にとっては嫌な、厄介な猟場であろう。そうしたことから、ここでは大きなイノシシが育つのだと思う。

「クマ号」は、迷わず大回りをして左手の地竹のほうへ走り、やがて見えなくなつた。「居る

な」と銃を握り、小走りに「クマ号」を追つた。少し走ると「クマ号」が鳴き出した。ワン・ワン、ワン・ワン。：。「よし、居たな」。大杉林であるが、木が大きいため見通しは利く。

「必ず下へ跳ぶ」ことに賭けて、ブローニング五連を握り直し、「さあ、跳んでみる」と構えたのである。今日は、上にはワンワン音を出す「マチ」が張られているので、イノシシは下に跳ぶよりない。3分、5分。：。「クマ号」は、相変わらず甲高い区切りのある声で「ワン・ワン・ワン、イノシシが居るよ。ワン・ワン、早く集まって！」と

叫んでいるようだった。このような竹藪や障害物の中での「止め」は、小型の「クマ号」の最も得意とするところである。よし、近寄ってみるか。：。私はゆっくりゆっくり歩き出す。左に回ると、大杉林の外れが地竹藪である。

下草のない杉林の中を、抜き足差し足で近づいて行くと、「クマ号」がひよっこ顔を出した。そして私を見ると、安心したように元の場所に飛んで帰り、何事もなかったようにまた鳴き出した。後を追って行くと、「クマ号」は枯れた地竹のつぶれた所に向かつて尾を振り、背毛を立てて一心に鳴いている。

「やっぱりイノシシだ」と、さらに注意しながら近づくと、イノシシは、いつもの「一番悪い場所」に止まっているようだ。その場所は、中央に出峰を横切るように1mほどの岩が走り、崩れた土などで段差になつているが、その段差がわからないように、上に枯れた地竹が覆いかぶさっている。

大きな竹のトンネルがいくつも、イノシシによって作られているので、多頭数犬を掛けると

必ず傷つく場所である。大猪は、地竹の中でも自由にバリバリ動けるが、犬は地竹が邪魔をして動きが鈍るからである。

地形も、下から1人で犬と攻めると、イノシシは岩の段差を利用して、一番奥からスルリと抜け、すぐ裏の小沢伝いに大峰に逃げてしまう。また、上から攻めると、100m下の大沢伝いに集落を越え、さらに下へ跳ばれてしまう。

私の愛犬はシャイな子が多く、集落には入らないので「はい、そこまで」となってしまうのだ。こうしたわけで、猟人の誰もが犬を掛けるのを尻込みするような場所のため、イノシシが寄りつくようである。

今回は、一番危険な下からだだが、「クマ号」が出口を塞いでいるので、そーっと「クマ号」の後ろに近づいた。イノシシ↓「クマ号」↓私という位置関係になる。しゃがみ込んで、じつと「クマ号」の先を見るが、奥は薄暗くて何も見えない。

「クマ号」が鳴いている所は、中央の小さなトンネルであるが、枯れて寝ている地竹の上に藪草が一面敷き詰められたようにな

っており、下からはよく見えるのだが、奥まではどうしても見えないし、イノシシがまくって出て来る様子もない。たぶん、「クマ号」とイノシシは6〜10mぐらい離れていると思うが、まくって出れば「クマ号」は盾にはならない。

私は、さらに少し下って、杉林の一番上のあまり大きくない杉の横に屈み込んだ。直線にして25mほどあるが、私には自慢の奥の手(?)があるのだ。それは、単独猟ではあまり付けてい

ないが、都内の銃砲店に特注して付けてもらった一番大きな、解像力も最高の「ツアイス」を付けていることだ。

この「ツアイス」のお蔭で、距離うん百mで、危うく逃すところのイノシシやシカを獲らせてもらったことも数多くある。特に、夕暮れの杉林の下の沢などで止まっているイノシシや、200mほど上の断崖の岩穴を覗くときなど、いつも強い味方になってくれる。そんなわけで、猟友からは何と言われようと付

けている「秘密技法(?)」である。

私は、迷わず倍率をどんどん上げた。：居るいる。大物だ。

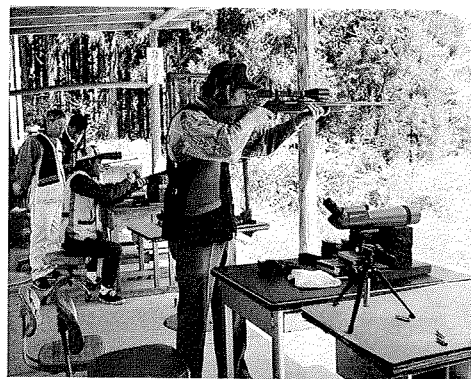
「クマ号」越しに一番奥の窪みにうづくまっっているではないか。両目が光ってはつきり見える。このような状態では、「クマ号」

は絶対に飛び込まないし、出口を塞いでいるので何時間でも止めるのである。

こうなったら「しめた」もの。何も焦ることはない。イノシシの後ろは岩であるが、少し窪んでいるので、地面すれすれの撃ち上げになり、25mの一発勝負である。ドキドキする、何度経験しても堪えられない瞬間である。ただ今日は、必ず一発で決めなければ、後の作戦も対策もない。「クマ号」は、ここまで働きで十分だ。

もし半矢で飛び出されても、あれだけ離れていれば「クマ号」は大丈夫だろうし、私もこの杉の木がある。一つひとつを確認している、「クマ号」が動いた。大きく回り込み、岩の上方から私のほうへ追い出すつもりようだ。これは、「クマ号」がいつもするラウンドである。

今回の勝利の「秘密兵器」=スコップはツアイス



「クマ号」が塞ぐようにしていた入口に何もなくなり、イノシシが丸見えになった。「今だ!」私は銃を杉の木に添えて、静かに06の引金を引いた。地響きのような轟音が山々にこだました。瞬間、イノシシは私の目の前に飛び出して来た。私は咄嗟に右に跳び、杉の木の右側に逃れて「一の矢を!」と思ったのだが、イノシシはズルズルともがくように、私の目の前に崩れ落ちた。次の瞬間、「クマ号」が駆けつけ、大猪の後ろ足に噛みついてた。「クマが大猪を噛み倒したぞ」：そんな光景である。



一流芸を見せてくれた「ナン号」(左)と1頭で大猪を止める「クマ号」(右)

「クマ号」は、なおもしきりと咬み込んでゐる。尻尾を振りながら、勝ち誇つたように咬み込む。大猪に反撃の力はすでになかった。

「やったぞ、クマ!!」と大声をかけ、しばらく様子を見ていたが、やがて大猪は全く動かなくなつた。「クマ号」もやつと安心したのか、咬むのをやめて私を見た。「よしよし、クマ。よしよし、よくやった」と走り寄つて抱きしめ、「うまくいったな、クマ」と何度も何度も頭を撫で、小さな体を抱き上げて喜んだ。「クマ号」も何か言いたそうに目を細めた。

「ミス号」と「ナオ号」を失くして落ち込み、山に出るのが億劫になつていた私の気持ちを、「クマ号」が吹き飛ばしてくれたのである。「やっぱりクマは名犬だ。クマが一番だ」と、「クマ号」を目の前まで高く抱き上げる。バカみたいであるが、こんな気持ちになれることこそ「単独獵」の原点ではなからうか。私は最高の喜びに酔いしれた。

わずかに1時間30分ほどの出来事だったが、私自身も経験のない「一統一狗」の大勝負であつ

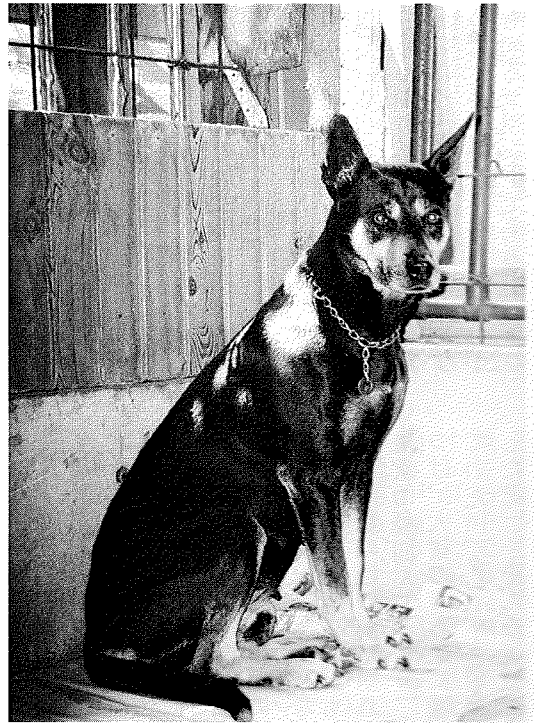
た。「ミス号」が大ケガをしたこの場所で、しかも「ミス号」達が命を懸けて教えてくれた教訓を生かし、今回は「犬の命」を最優先に計画し、それが見事に的中した勝利であつた。

私自身、信じられないことだが、今回の作戦と行動は「ミス号」と「ナオ号」が遺してくれた財産のように思えるし、倒した大猪を前にして考えると、「ミス号」達も闘いを挑んだ相手であつたらうし、「仇討ち」ができたと思うことにした。

曇りがちだつた気持ちが一瞬と晴れ、改めて単独獵でやるべきことと、その道筋が見えてきたような気がした。湧き出てくる元氣と勇氣、そして自信を小さな「クマ号」にもらつた1日だつた。私は幸せ者だ。

### ●「クマ号」の名芸と「ブル号」達の荒芸

「クマ号」は、誰が見ても大猪を止めるようには見えないし、口の悪い人が「ボチだ」とまで言うような小さい犬だが、孫とよく遊ぶとても賢い子である。私の犬舎には、「ブル号」をはじめ、強めのイノシシを1頭で



「ナン号」素早く「クマ号」を咬み、後足に咬み入る。ランとコンビの最善手である。

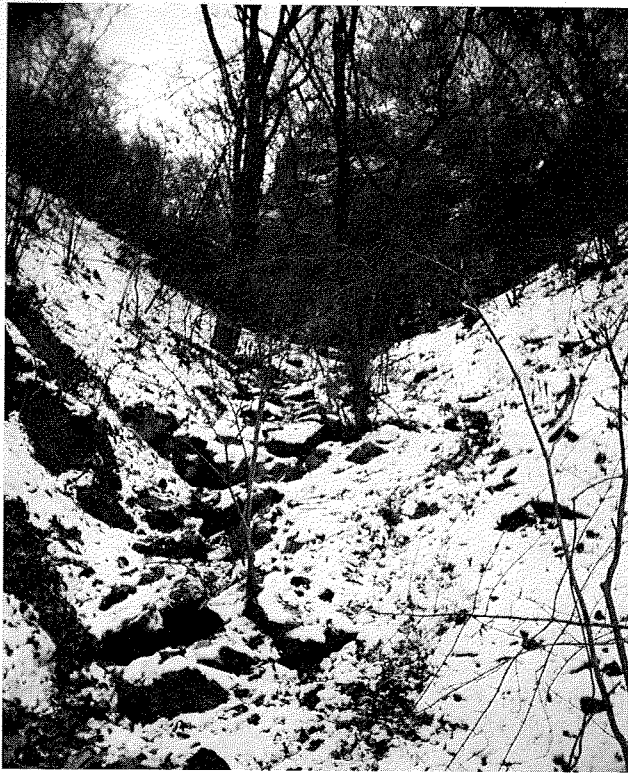
止める犬が何頭かいるが、「クマ号」は他の犬達とは決定的に違つた猟芸を持つてゐる。

「クマ号」は、起こした場所つまり、寝屋でイノシシが飛び出せないように、あるいは、イノシシが「こんな小さなボチめ」とバカにして止まつてゐるような：そんな芸をする。とにかく、見つけたイノシシを何時間でも止めるのである。

一方、前述のように、ただ強い犬、大きいだけの犬ではイノシシは止まらない。寝屋に飛び込んで咬みにかかる芸、これは私の愛犬で言えば、「クマ号」以

外の1頭でも止める犬達である。

「咬み」を前提で寝屋に飛び込めば、1頭では大猪は止められない。大猪の場合は、まず飛び出して一目散に逃げ出す。1頭でも止められる実力犬を5頭ぐらい掛けた場合は、60kgまでなら寝屋でそのまま咬み止めることになるが、大猪は飛び出す走る力が犬が勝り、谷や大岩を背にするときには止まるが、ここからが大猪と強い犬群の力比べ、技比べの攻防となる。これは、大猪でも犬によって「止められた」のであつて、「クマ号」のように1頭で止める場合は、



ここで大猪をゲット。右上がイノシシの寝屋である

イノシシがゆとりをもつて「止まっている」のである。

当然のことであるが、「クマ号」は無傷であり、「ブル号」達は受傷も多く、時に命まで落とすこともある。単独狼では、「ブル号」達のような犬群で「がちり止めさせて」撃ち獲る（あるいは「刺す」。危険も伴うが、私はこの方法で行っている。単独狼においては、「クマ号」が一番理想の狼犬のようだが、この犬の場合も、初めからこの

ようになったのではなく、犬群での「咬み止め」や、「追跡」「止め」「咬み」という一連の狼芸を散々こなした後、6歳ぐらいから、イノシシが何頭も出て、犬群が分かれたときに見えるようになったのである。

以前にも書いたが、私の単独狼は、足跡などから判断して、「このイノシシなら、4頭の実力犬で止められる」と思っても、1頭の実力犬をプラスして5頭で狼を行うことにしている。少

しても犬達のケガを防ぐための狼法である。

「クマ号」が実狼で見せる芸は、それは「素晴らしい」のひと言である。大猪でも、寝屋でじっと止まっているのである。また、逃げ出すと速い足ですぐに追いつき、少し離れた所でまた止める。「クマ号」は、イノシシを決して力で咬み止めるのではなく、速い足で追いつき、両手や両足に素早く口をかけて止める。本来の「咬み止め」のように、力で止めるのとは少し異なる芸である。

また、大きく回り込んで、イノシシの前面から吠えつく。そして、3回でも4回でもイノシシに飛ばれては止め、飛ばれては止める：この繰り返しである。大切な止めの「鳴き声」だが、甲高い「ワン・ワン・ワン」という区切りのある、はっきりした鳴き声である。また追い鳴きは、小刻みな「キャン」に近い連続の「ワン・ワン」である。

このように、「クマ号」の止めは、その鳴き声でどんな場所が見当がつく。何もない谷などでは、「ウ・ワン、ウ・ワン」であるし、ブッシュの中では、

全く入口を塞ぐように、入口に向かつて「ワン・ワン・ワン」と、いつまでも鳴き続ける。このようなときは、実に長い間止めている。そして、私が寄りつけないでいると迎えに来る。あくまでも落ち着いたもので、寝屋に飛び込むこともない。

イノシシとの間も、決して1mとまで近づくことはなく、大猪ほど離れて5〜6m、時には10mぐらい平気で離れる。それどころか、上から吠えたり横で吠えたり、大きくラウンドもかける。だが、私としては近づくのが大変で、「クマ号」の先の藪を遠くからイノシシを見つけようとしてみても、なかなか見つけられずに、近寄ると一番見通しの利かない所をすり抜けるようにイノシシに飛ばれてしまう。

若くて足が強いときなら、一番の狼法は「クマ号」の1頭引きかも知れない。「クマ号」は、イノシシに向かうときは背毛を立て、小さい体を目一杯大きく見せようと必死で、時には唸るように吠えたりするが、イノシシの牙にかけられない素早さを持っている。やはり「クマ号」は名犬だと、私は思っている。